

北欧＝最近障害者事情 第2回

夢は夜ひらく

全国障害者問題研究会事務局長
日本障害者協議会理事

園部 英夫

「夢は夜ひらく」という歌があった。障害者の生活をまるごと知るためには、「夜」に視点をあてて考えてみたい。コペンハーゲン(デンマーク首都80万人)の「ヴォクセンクラベン」というちょっと大人の障害者を対象にした余暇センターを、夜の7時すぎに訪問した。1月初旬、当地は午後4時ですでに暗い。夜は長い。



「アナタ ハ エイゴ ガ ハナセ マスカ？」車いすの男性から話しかけられた。言語障害もあるので、なかなか困難な英会話となったが、そこはお互い理解しあいたいという気持ちがあれば、なんとなくは伝わるものだ！(と信じたい)。

彼は15歳の時、バイク事故で障害をおり、いま37歳。日本人と話しをするのははじめてだ、と言っていた。チェスとシューティングが得意で、この余暇センターは週2日利用し、他の日は自分の体のバランスの調整のためトレーニングにあてているという。

「アナタ ハ チェス ヲ スルカ？」と聞くので、「プレイ ショーギ！だよ」と言うと、彼は目を丸くした。「ソレモ マタ ジンセイ ダ…」と何度もつぶやいていた。

■自分たちで活動を企画し、楽しむ

施設長のベント・ムーランさんと利用者委員会のベネー会長の話をメモする。

余暇センターには175名の利用登録者がいる。一日平均利用者は58名。障害の軽い人から重い人まで、年齢は25歳から50歳までが利用する(希望があれば65歳まで使えるが70歳の人もあるそうだ)。利用料は月額1400円。利用者が居住している市は1回の利用について4400円をセンターに支払う。社会サービス法88条(「福祉」予算)で「障害があるために特別な負担をかけてはならない」という規定による。



ヴォクセンクラベンにて

路線バスを使い自力でセンターに来れる人は約20人。その他は「移送サービス」を利用している(月額1800円、同額を市も補填)。

月曜から木曜は6時半～9時半が「授業」(パソコン、料理、テキスタイル、シルクペイントなど)。金曜の夜はパーティなどのお楽しみ企画(そのときは140人も来るそうだ)。年2回は海外旅行も。活動内容は会長がスタッフと協議しながら決めている。

設立は1982年。午前中は高齢の障害者のデイアクティビティセンターとして別団体が運営している。

■若者たちの余暇センターも

10歳から25歳までの青年を対象とした「青年クラブ・ラブブック」は2004年に訪問した。「ヴォクセンクラベン」から車で数10分のところにあった。

ラブブックの利用者は一日平均100人。午後から夕方60人、6時以降は40人くらい。活動はスポーツ(乗馬、スキー、スイミング、ボーリング)やクリエイティブな活動(ペインティング等)、音楽の3つが中心。キャンプや国内旅行、外国旅行も(万里の長城が人気だったそうだ)。フルタイム職員24名、スタッフ総勢100名。

「大事なことはスタッフを介してでなく、自分で

世界をつくっていくこと。トラブルはしょっちゅうあるが体罰は絶対しない。226名が登録しているので、気の合う仲間はだれかみつかる。友だちづくり、ネットワークづくり、恋人さがしも不可能ではない」「すべての人が同じことができるとは思っていない。なるべく選択肢が多くなるようにしている。なるべく安く、すべての人が参加できるようにしている」とサッカーの日本代表監督だったトルシエ似のゲアス副施設長は熱っぽく語ってくれた。

日本語では「余りの暇」と書く「余暇」。なんとなく、前面に出すのをためらうような響きを感じるコトバだけれど、本当は、とっても大事な、自己実現としての人生の大切な時空間なんだ。

■学びの場、なかまといっしょにいる場

「幸せになるためのイタリア語講座」というデンマーク映画があった。週に一度のイタリア語初級講座で出会った男女6人の冬物語だが、映画のワンシーンにデンマークの制度がさりげなくふれられていた。「学びたい」という7名をこえる市民の要請があれば、市はその活動を支援しなければならない。それは、同年齢の市民と同じ学ぶ権利を障害のある市民もまた享受することができるということだ。

障害者が学ぶ「夜学」を見学したい。そんな願い



オーフスのイブニングスクール

が実現したのは2001年の旅だった。

その日の夜、デンマーク第2の都市・オーフス(28万人)の郊外にあるイエセン・フリティドスコレンを訪ねた。昼間は義務教育後の知的障害者の特別学校で、夜はそれを借用している。

「イブニングスクール(夜学)」は、多くの市民が利用している。「手芸」や「乗馬」のコースに障害者も参加する場合もあれば、知的障害者を対象にしたコースもある。コースは多様で自分で選択できる。音楽やコンピュータ、パンケーキづくり、犬と遊ぶ、などなどそれぞれ14回で、半年単位で35時間。受講料は約1万円を自分で払う。所得保障がしっかりしているので、十分支払えるとのことだ。

「音楽コース」には、近くのグループホームから3名が参加していた。音楽を楽しむこととともに、卒業後の友だちや男女の出会いの場の意味も大きいそうだ。

ビートのきいたノリノリ音楽が教室中に響く。エレキギター、ベース、キーボード、ドラムス、パーカッション。ダウン症の人がいる。自閉の人もある。カッコいいサングラスをかけた青年もいた。電動車いすに乗った女性、その横の赤いTシャツの青年はときどき人目をさけてチューをしていた。



コペンハーゲン近郊の作業所を見学した日。織物にとりくむ彼女らに、「仕事が終わったらどうしてるの?」と聞く機会があった。「3時過ぎには、ラブックに行くのよ。たくさん友だちが来るし、楽しいよ」と笑顔で応えてくれた。

日中の働く場、活動する場がある。夜には気のあつたなかまたちといっしょに楽しむ場がある。人生は楽しく、いいもんだ。(つづく)

*詳しい資料は「北欧ノート」をご参照ください
<http://www.nginet.or.jp/~kinbe/SAS/SAS.html>